
左手の力と右手の加護

睡眠不足

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

左手の力と右手の加護

【Nコード】

N2454M

【作者名】

睡眠不足

【あらすじ】

この作品は初心者でヘタな作者が自分の想像をフルに使い書いています。

あらすじは……

左手で雷を操る少年「火村 陣」はある日突然に火の鳥を見てしまう。その後どういふ訳か、神の一人と戦う事になり、その後、最高神の“創”を継いで貫うといきなり五人？の神から宣言された。しかし、神達の目的は他にもあった！その目的とはなんなのか！
全ては神のみぞ知る

※あらずじ修正しました。
※只今激戦中？

始まりの炎（前書き）

今日から始めた小説です。
初心者なので文句などはやめてください。

始まりの炎

男は歩いている。歩く、歩く、すこし早く歩く、走る、走る。いつの間にか歩くが走るに変わっていた。今、男の心は喜びに溢れている。ここで男は状況を整理する。

俺の名は火村 陣。そのまま（ひむら じん）9月生まれの中学2年だ。両親は行方不明というやつだ。今は爺さんのおかげで中学校に行っている。この爺さん何故か俺を気にいったらしく色々助けてくれる。そんな事はともかく、今、散歩中に野原（爺さんの所有地）を歩いていたら、なんと火の鳥を見つけた。全長2mで俺の想像と違い、全てが炎に包まれているのではなく。羽のみが炎で包まれた。俺はちなみにその鳥を捕まえるか、写真で撮るかして爺さんに見せようと思った。爺さんは最近「人生に刺激がないのう……：人生やめようかな……」などと言っていた。若干爺さんがヤバいのだ。なのでこの鳥を爺さんに見せたいのだ。爺さんはいいい歳して好奇心がある。つまり、この鳥を見せれば、「なんじゃ！この鳥は！凄いぞこれは！人生捨て切れんな！」と見るだけで子供のごとくはしゃぐのだ。しかし、俺はカメラをあいにく持ち合わせていない。つまり、炎を出す危険極まりない鳥を捕まえようと思う。ちなみに、俺は小学1年の頃左手にワイヤーを引きずり回して遊んでいた時（なんでそんな事をしたのかも覚えていない）、俺に雷が落ちた。雲一つない青空なのに。その時、運が良かったらしく。ワイヤーに電力が全てに近くいき。ワイヤーを巻き付けていた左手が少し焼け焦げた。雷が落ちて来た時点で運が良いと言えないが。その後痛さの余り気絶したらしい。あの後、両親から聞いた話なので自分自身では覚えていなかった。医者は、「脳がショックを忘れようとして記憶喪失になったのでしょうな」と昼飯食いながら言っていたそうで、それ以来その病院には行かない事にした。しかし、その日以来左手から電気（自分で雷と呼んでいる）を出せるようになってしま

った。要するにその雷で火の鳥を捕まえる。そうこう考えながら気づかれないように野原の中の長く伸びた芝ではなく雑草の中で火の鳥まで40m辺りまで近づいた、するといきなり、

「あっ！ミィだ！居たよこの世界だった！降りるよ！」

いきなり30m先の地面に穴がぽっかり空いた。まるでそこには、なにもなかったかたのように穴の周りは土の色をしておらず真っ黒な闇、同然の色だった。そこから大量の蛇が現れた。その蛇達は真っ黒な空洞をその身で覆い尽くした。まるで何かを隠すように。しかし、いきなり蛇がポップコーンのように弾けた。と思ったらなんと空洞の中から白い格好をし、白い目をした白髪青年が現れた。地面の空洞は真っ黒でなく、ちゃんとした茶色の平らで雑草が生えていた。

「全く、ミィは良く困らせてくれるよな！全く！」

白い青年の真横からから黒い炎の火柱があがった。その炎がポンッと弾けた。と思ったら、また青年が現れた。

「本当だよ！さあ帰るぞ……………ふーん、この時間だったのか」

一瞬だが黒い格好の青年はこちらを見て何かを呟いた。

「さて、じゃあ皆で帰りますかあ〜」

白い格好の青年は、あくびをしながら地面を叩いた。周りにはボンツ！という音が漏れ、青年は突如として消えてしまった。その後黒い青年の周りを闇が包みこんだと思ったら、やはり消えていた。蛇はすでに消えていた。

「……………」

この様子を見ていた陣は呆気にとられていた。その後周りの雑草が燃え出した。陣を囲むようにして。

その後、陣の意識は闇に落ちていった。

始まりの炎（後書き）

次はいつ更新か分かりません。
すいません

森の中での戦争勃発（前書き）

だーれも読んでいないのかな？
誰か読んでくれー

森の中での戦争勃発

どこなのか全く分からない森の中を陣は歩いていた。

「ああー、ここどこだよ！」

陣は叫びながら近くの木を八つ当たりで蹴っていた。

「目が覚めると森の中だし！そして、なにより、もう夜じゃなか！
今度は木に回し蹴りを繰り返したが、木に弾かれて、無様に頭から
転んだ。

「いつ、痛うー！」

陣は頭を抱えながら芋虫のごとく、くねくねと体を動かしている。
その様子はかなり滑稽な物だった。陣は元々顔が普通より良い方で
性格も、老若男女共に好かれる性格だったが、今はどこから見ても
陣がそのような人物とは誰一人、想定できないだろう。

「もう体力、精神ともに限界だー……………」

疲れるし、目が覚めてから状況整理をして五時間歩いても森を抜けて
ねー！腹も限界だし、食料と寝床を確保しねーといけねーしな！
陣は精神的不安定なのでとっても苛立っていた。が、取りあえず歩
いている。歩けば何とかなる、と思っっているからだ。

「ウサギでもないかなあー。飯、飯、飯、飯！……………」

いきなり陣は空腹のあまり叫びだし、森を走り出した。陣が二分間
ぐらい走ると右手側の木に（赤いフクロウ）が留まっているのを陣
は見つけた。そして、指を差し子供がほしい玩具を見つけたような
微笑ましい笑みが顔中に広がっていた。ただ一つ、獲物を見つけた
ような、陣の目を除いては。

「フクロウじゃん！食えるかな？……………まあ、とりあえず
色が変わけど、食べますか……………」

そう言い切ると陣は地面に落ちていた小石を拾い、右手を雷で強化
させて思いつ切り赤フクロウ目掛け投げた。ちなみに、雷の強化の
おかげで、小石は音速を超えてフクロウを狙い、音速の小石により

一撃で仕留めるはずだったが……

パシッ！

という音がし、フクロウに小石（速さの余り原型を留めていないが）を羽でアッサリとはじかれてしまった。

「は！何故に！ドウシテ！」

陣の顔はさっきまでの笑みはどこ行く風か、驚きの顔で固まっている。

「奇跡の天の怒りを閉じ込めし器、その器、知恵の情報と紅き生命の欠片により生まれし物との戦いの後、仕組まれた奇跡の子である巨人を生み出す事になるだろう、その事を望むとしても、しなくても………」

赤いフクロウがいきなり喋りだし、フクロウの前に数えきれない数の炎の矢が現れた。炎でできているのに原型を留め、いつでも放てるように準備されているように見え、たかがフクロウの殺気に陣は底知れぬ恐怖心を抱いていた。フクロウが喋った事は恐怖心で気になっ

「人が、いや、奇跡の器がどれ程のものか。まず確かめるとしようかな。この私がね！」

フクロウは殺気をあびつた陣に叩きつけると、羽を大きく羽ばたくのではなく、振った。まるでそれが合図のように炎の矢達は陣目掛けて疾風の如く降り注ぐ。

「う！」

陣は走って矢を避けようとしたが、いかんせん数が多過ぎた。第一波はなんとか避けたが、第二波は避けきれず腹に矢が刺さってしまった。矢が刺さった腹からは、何か赤い個体じゃないものが飛び散った。陣には最初、血なのか、炎の矢から出ていた火の子なのか分からなかったが、次第に意識が薄れていくので赤いものが陣自身の血だと理解した。

「俺は死ぬかなあ………ウッ！」

なんだこの感じ、死にかけて意識が薄くなっているせいか、心臓が

異常に鼓動を打つのが早くなっている。死ぬんだから、異常も当然か、と陣は思っていたが、いきなり陣意外の心が割り込んでくるような感じがした。陣は死にかけているせいで、アッサリと他人の心に陣の心は負けてしまった。フクロウは異変に気付く様子も見せてはいない。

「"無"は結局現れなかったか……所詮は"あやつ"のたわごとか」

フクロウは後ろを向いた、そして飛び立とうとした時、

「ウラアアアアアア！」

陣は起き上がり、いつの間にか持っていた、金色に光る槍を音速ではなく光速で投げた。一瞬気付きおくれたフクロウの羽に刺さった。その刺さった所から、電流を放電して。

「……………」

フクロウは無言のまま羽の槍を高熱で消し、傷口を火で焼いた。そうするとどういふ訳か、火で焼いている所から傷口が塞がってきた。「おお、これは、これは何かが人に付いていると思えば、裏切り人側に就いた"雷光"でしたか、こきげん麗しゅう。200年ぶりか？」

フクロウが陣に先程より濃厚な殺気を叩きつけながら言う。

「たかだか最弱君に目覚まされるなんて"器"が心配になってきたわ。ねえ最弱の"炎界"君。変換間違えりゃ"宴会"だな。笑っちゃうねー！」

「ふん、最弱かどうかは試してみるかね?"雷光"！」

フクロウは先ほどのように嫌味を言わず、自分の周辺に大量の炎を出した。

「いいじゃん！やろうか！」

陣、いや雷光はそう言うで一瞬で誰もいなかったかのように消えた。立っていた地面にクレーターと言わないまでも大きな穴を作り。

「ちっ！さすがにこの速さは厄介ですね！」

フクロウは周囲2Mに炎で囲い、辺りに炎の矢を乱射していた。

「あんな囲い！」

雷光は高速移動をしながら雷で出来た槍を投げていた。槍と矢はぶつかったりもするが、当然矢は槍にぶつかる炎が裂けるようにして矢が消えていく。さらに、槍はフクロウが張っている炎を確実に弱くしている。雷光は勝利を確定したとおもっていた。しかし、

「貴様の負けだ雷光！ブラット・マグマエクスパースト！」

「最高呪文！炎会：…なるほどそう言う訳か：そのまんまじゃねーかあー！」

高速移動をいきなり雷光は止めた最初は最高呪文の対応だったが、対応を仕切れなかった。

なぜならフクロウの放った技は、自分と特定の敵を自分の仮想世界に閉じ込めることだったからである。

その世界の名はマグマワールドありきたりな名だが威力は絶大で、その世界では炎を完全に制御出来る。しかも、フクロウはその世界そのものだから炎の威力も上がる。

「形勢逆転ですね、雷光！所詮人間に就いたが運の尽きですよ。」

「くっ！なーんて言うかよ！」

雷光の周りに沢山の動物が現れた。勿論すべて雷で出来ている。

「さあ！ラストスパートの用意は出来たか？炎界！」

「何を世迷言を、雷光、そちらこそ秒読みは始まっているんですよ」

森の中での戦争勃発（後書き）

次回は完全に戦闘やりまーす。

赤い世界（前書き）

なんと言うか短いし下手ですが読んでいただけると光栄です。
変換間違え、誤字があったらお知らせください。

赤い世界

両方が動いたのは同時。しかし、雷光がフクロウに蹴りをいれ距離を離した。

「うぐっ！やってくれますね……炎よ我が身よ映したまえ！」

「分身ってねー古いんだよ趣向が！一閃雷光」

フクロウが炎から作り出した分身が雷光が指を向けた瞬間、指から一筋の光が出たかと思うと、フクロウたちに向かい、フクロウたちが文字通り消滅していく。

「さすが、格上ですか。しかし、負けてはられないですよ。それに、ここは私の世界です。いくら雷光でも有利には戦えませんよ。高速移動はこの世界では出来ませんしね。ここにいれば少しの傷もすぐ回復しますからね」

「なんとでも言いやがれ！」

雷光にいた周りの雷で出来た動物たちが一斉に消えた。残像を残して。

「なっ！高速移動はこの世界では雷光は出来ないはずだ！ということだ！」

「お生憎、俺はたしかに、世界に同調して高速移動を可能にしてるよ♪だって筋肉が疲れるし♪だけど、この動物達は疲れなんて知らない♪筋肉がないから」

「……うっ！こざかしいですね実に！……こうとなれば、世界ごと焼き尽くしてやりましょうか！！私の世界ですから簡単にできるでしょう！世界に影響なくね！魔力がかなり持ってかれますが、まあ雷光を倒せるならいいでしょう！」

炎界の周りをいくつもの炎で、できた戦車がかたどられていく。その数およそ5000台。さらに、炎界の下に大きな魔法陣が出来上がっており、そこからなにかの手がててきた約30mぐらいの手が手の周りには、炎が渦巻いている。

「イリーフトかと言うことは本気でくるってかい。あゝ愉快♪愉快♪……………だからどうした！」

雷光は流石にまずいと思ったのか自分の周囲を雷でできた槍で固め、イリーフトに全ての槍を発射した。全ての槍が命中し爆発した。が、シューユ〜と火に水をかけたような音がし爆発でおこった煙がひくと数台の戦車が転がっているのが見えた。

がイリーフトには傷がついた様子もない。それを見た雷光はチツ、と舌を打った。

「5000の内3800を犠牲にしてもイリーフトを守るってか、よほど大事にしてるね〜」

声は優しそうだが殺気が雷光の顔には広がっていた。

「でも、次はどうかね！」

「なにをする気かな？雷光？イリーフトが出てくれば私の勝ちのはずだがね」

炎界には、先ほどの焦りはなく、余裕に満ち溢れていた。それを見ればイリーフトがどれだけの威力があるのかが伺えるだろう。しかし、その余裕は長くは続かなかった。

「ギャアアア！ギョヤヤアアア！」

「何！イリーフトが私のイリーフトがあ！くそ！雷光！」

なんが起こったのかを説明すると、黄色の閃光が三つ、上半身が出てきていたイリーフトを貫いたのだ。その閃光の正体は、先程高速で移動し始めていた、雷で作られた動物達である。炎界は勝利を確信し忘れていたのだった。そして戦車も次々と数を減らしていく。

「この私が私！！許さない！！絶対に！！」

今や炎界は狂ったように叫び、地にも火の海にも空にも大気にまで大きな魔法陣を大量に創り出していた。

「世界を崩壊させてビッグバンを起こすつもりか！」

雷光は自身を大きな雷で囲った。何倍にも強化をし、ダイヤモンドさえも超えるほどの強度を持つ雷で。そして、周りは、高圧のエネルギーに包まれた。

落下した(1) (前書き)

誰も読んでないと思うがあえて言います。DSIで書き込んでいるので、容量不足で変な所でブチぎれます。

落下した(1)

(右手が痛い何故だろう)

分らない。

(でも、感覚がおかしい何故だろう)
なにかが違う。

(肉体がなく精神だけが存在するような感じがする)
なんでそんなことがわかる？

(自分で思っているように良く分からない)
そうだろう。

(精神だけなのになんで右手が痛むのだろう)
分からない。

(あの光はなんだろう、後少しで手に取れそうなのに)
とても不思議な光だな。

(なぜか心安らぐここはどこだろう)

まるで小さかった頃の思い出の場所で日向ぼっこしていた時のようだ

(誰か、ここはどこか答えてくれよ)

「ああ、答えてやるよ！」

突然の返事に驚いた自分は普通だろう。でもなんかこの声、この感じどこか遠い過去であったような気がする。でもそんなことは……
……この際どうでもいい。何も分からない不安は何か頼ろうとする。俺はその状態だな。

(誰かいたんだ……まあいいや教えてくれよ)

「後悔はしないのか？」器「成長したのか」

(「器」？ってどういう事かな？)

「器」って俺の事を指しているようだがなんだろうか？生きているか分からない状態で死亡フラグか？

「なくにも覚えてないのか？本当にか」

何かしらあるようだ。だから、「相手の勘違いかな。」と気軽に思

えなくなってきた。

(何をだ)

「この"雷光"を忘れたかあ？」

雷光？なんだっけ遠い昔で聞き覚えが……

(“雷光”なんて知らない)

「"器"は覚えてないようだなあ。どっうしたものかっな！」

この気軽に言ってくる感じもどっかで覚えが……痛ッ！つうか辛ッ！なんで！体がないかんじなのに、なんで辛いんだ！

(辛い、辛い、辛い！！！！！！)

「誰だ、なんか悪さをしている奴は……あっ！これじゃあ"器"の魂を呼び出したのに戻っていつちゃう！」

もう一人の声が慌てている。しかし、この不可思議な現象は夢だったように、あっさりと現実に戻ってしまった。

S A I D 変更

起きないなあ。

私の前にいる、黒髪の人、唐辛子を口にいれたのに……

「べ、別にイタズラをしていた訳ではいからね、頭にぶつかって来た応酬でもないからね！」

誰に言い訳しているんだろうか私は、でもいきなり散歩していたら人が降ってくるなんて思わなかったけど、よくよく考えたらそれどころじゃないかな？救急隊、呼ぼっかな。あ、でも、外傷なし！心拍数なし！呼吸なし！だから大丈夫か。だって死んでるじゃん！だから救急隊を呼ばずにも……あり？倒れてるの若いよね、同い年ぐらいで寿命じゃないし……でも、外傷がな……い……

「大変だあ~~~~！！！！毒物事件だあ~~~~！！！！！！！！！！」
思い切り叫んだ大きな公園の中だがだれか気づくだろうと願いを込めて。そして、

「エッ！（ガン！）痛っつ……………」

頭が本日二度目の衝突、痛い。あれ、でもなにがぶつかったんだろ

う？と思えばつかった原因を探した。思いのほか早くに見つかった。黒髪の降ってきた人だった。なんか気まずい。

「痛た……！あつ、すいません頭をぶつけてしまったようで、大丈夫ですか？」

空から降ってきたから、どんな変わった人かと思ったなら割と良い人だった。

「大丈夫、大丈夫です。そちらこそ、いきなり空から降ってきたんですよ大丈夫ですか？」

私が今不思議に思う事を聞いてみた。勿論、返事はついで。だから、疑問の方に熱をいれて喋ったかもしれない。だって、私はそういう人だもん。

「えっ！空から降ってきた！俺が！」

まるで心当たりがないような言い方であった。私は、スカイダイビングの途中にシステムの誤作動で落下したんだと思った。全然違ったんだ……あつ！ヤバイ唐辛子を除去しながら、警備隊に連絡しきやた……何でもないとすると、罰金があゝゝ！何で税金で動いているのに誤報で罰金とるんだろ？てか、いくらかな……幾らギルドで働いていても罰金はきついな。幾ら"天界"だっけ？から攻め込まれて手が足りなくても誤報で罰金だなんて……

「……あつ！そういうえば訳が分からない俺の落下はともかく、ここはどこでしょう？」

「ん、まあ空から落ちてきたならここがどこか分からないか、ここは"魔科平和公園"だよ。まあ、有名なところに落ちて良かったじやん。ここからなら、あなたの家がどっちの方向か分かるでしょ」

「魔科公園なんて知らないんだけど」

「えっ！」

驚いた。魔科平和公園を知らないなんて。私でさえ、子供の時から知ってたのに。"私でさえ"とは私が頭が悪いげとって意味じゃないからね。ほ、本当だよ！

「あのさ、ちょっといい？あれは不味いんじゃないんでしょうか？」

特に命の危機を俺は感じているんだけど……」
黒髪の男に言われた方には驚くべき状況があった。

落下した(1) (後書き)

ああ、自分専用のPCが欲しいよ。

落下した2（前書き）

……なん……だと！

一人称で書いてるつもりが色々書きかたが混ざっている！
やはり馬鹿で素人では小説は書けないのか！

落下した2

side keep

「そんなバカな……まさか……」

私は自分の目を疑った。警備隊がいるのだ。いや、まだそれはいい警備隊がいる分には、しかし、警備隊が小隊2つやって来たというぐらいいるのだ。それどころか、人によっては、一発で岩も消し飛ばす大型銃を持っていたり、戦車とはまではいかないが戦車とあまり変わらぬ威力を持つ自走車を走らせていたり、最新型のミサイルを導入されたステルス戦闘機まで駆り出され、戦闘機10機が今も私の上空を飛んでいったのだ。

「ついに………魔科平和公園まで侵略されているなんて………あっ！逃げないといけない！君そう言えば名前は！」

警備隊が向かった方とは逆の方に駆け出しながら先程聞かなかった名前を聞く。

「俺は、火村陣って言うんだけど、あれは一体どういう事!？」

「あれは警備隊って言って、市民の平和を守るために税金で作られた、組織よ!って言うか、陣って記憶喪失?余りに色々知らな過ぎだよ!後、話は安全な所まで行ってから!後、あの装備だと、天界が攻めてきたのかも知れない!」

「天界?」

「もう話は後!」

side jin

とにかく、良く分かってない俺がいるけど、とにかく危険な事は重々承知した。と思う。雷で強化しているので大して疲労はないが結構な速さで走っている俺について来れるこの人は凄いなと思う。この人とは一緒に走っているこの同年ぐらいの高校生かなって感じの女子?いや、このぐらいの年だと女性と言ったほうがいいのか微妙

な年の女性がいます。髪は長く、少し染めているのではなく自然な茶髪が混じった髪をしている。顔立ちは、俺には美しいとしか言いようがない。そして、どこか雰囲気は今走っているのではないが、説明が難しいがふんわりとした？イメージがもてる。と考えながら横を向きながら走ってたら、視線に気付いたのか、こちらを向いてきた。

「何！？何かある！？」

と緊迫しながら聞いてきた。そこで、俺は何を考えているんだと思いながら適当に考えた言い訳をした。

「いや、名前を聞いてなかったなって思ったのと何時まで走ればいいの？」

俺は走っているとはいえ、雷で強化しているので、口調にも余裕があるが、向こうには余裕がないらしい。

「えっ！名前！まあ名乗ってないのは失礼だけど、今言わないといけない？ちょっと息切れして来たんだけど……まあいいよ私の名前は、的葉爽、爽って書いて"さや"って読むの、後30km位で目的の所につくからもう少しの辛抱だよ」

「遠くない？30kmって！」

「仕方ないよ、私だってもう疲れ走れないけど頑張るから……陣も頑張れ！……あっ！やっぱりギブ……アッ……プ……」

そのまま的葉が倒れた。しかし、俺は向かう場所を知らない。最初は、的葉を引きずってでも連れて行こうと思ったが、行く場所が分からない。的葉の言う限り、とても安全な所だと思っただが、仕方ないので、的葉を背中に乗せて取りあえず直進した。30kmを。勿論、雷で強化をしたが俺はともかく、的葉は時速180kmの風をもろに受けると危険なので雷の膜で周囲を囲って飛ばした。雷のおかげで風圧を感じる事なく到着した。取りあえず、直進しかしてないので、ここがお目当ての場所かも分からない。周りには沢山のビルが建ち並ぶ、そこでどれが目的のところか分かったらエスパーだ。的葉を俺は起こした。

「あれ、私は何をしていたんだっけ？あれ！あなたはどちら様で？寝ぼけているらしい。俺には良く分からないが異常事態じゃなかったのか？」

「なに寝ぼけているの的葉。ここが目的地？」

「……ん、あれ陣、私は何をしていたんだっけ……あつ！逃げないと！……ってありゃ？目的地に着いてる……あ、陣有難う御座います。本当に申し訳御座いません。私が頑張れと言っておきながら……」

「あついや大丈夫だから」

「陣とりあえず、記憶喪失っぽいから保護って名目上ついて来て、陣も状況知りたいでしょ？」

少し悩んだが俺はすぐに答えた。

「良く分からないけど状況を知りたい」

的葉が手をポンツと効果音が付きそうなかんじで叩いた。

「よし、決まり。じゃあ中に入ろうか」

そう言いながら俺を引き連れ、沢山建ち並ぶなかにある一つのビルに入っていた。

俺はこの時に、この後起こる事なんか想像をしていなかった。

落下した2（後書き）

もう滅茶苦茶です……………

滅茶苦茶でいい人は読んで下さい

そして、誰か小説の書きかたをお教え下さい。

ギルドの中（前書き）

なんか急展開かな？

ギルドの中

今、俺はとてもデカイビルの中に入っている。中が入り組んでいて迷いそうなものだが、的葉はどんどんと進んで行きいきなりその足を止めた。どうやら目的地に着いたらしい。目的地は地上8階の扉に指令室とかかれた部屋だった。的葉はノックをして、

「失礼します。ギルドランク"36"の的葉爽です。たまたま私用で出掛けて居たさいに、天界が"魔化平和公園"まで攻めて来たのを目撃しました」

そんな言葉を言いながら的葉は、部屋に入ったいった。俺はどうすればいいのか分からなかったが、取りあえず礼をし、部屋に入ってしまった。その部屋に居たのは、どこか平凡としたどこにでもいそうな"おじさん"そう、お兄さんではなく歳が"おじさん"なのだ。そのおじさんが高級感溢れる机があり、その上にひれ伏している。おじさんが座っている椅子も高級感が溢れてくる。

「で、天界が攻めているのでギルドが危機だと。君は言いたいんだよね。でもこれは問題なんだよなあ」

君の言う通りこのギルドの危機だろうけどねえ」
だってさ、たかがギルドがさあ国の要請も無く世界丸ごとが左右される戦いをしていいと思っっているのぉ！」

おじさん、いや、おっさんは、タバコに火を灯さずに口にくわえながら、的場が言った事へ返事をしている。そして、おっさんがなにやら呟いた。と思ったら、火を灯していなかったタバコに火が点いた。どういう事だと俺は、首を傾げたがおっさんは言葉を続けた。

「つと言いたい所だけどさあ」

なんと、なんとおお」

国から依頼が来ちったあぞ！喜べえい！それにもうみんなも出てっ
てるしなあ」

っう事での場爽くん！いつてらっさ」

おっさんがそんな事をいうと、的場は、一礼して部屋を後にする。俺も取りあえずそれにしたいが、でようとするが、

「あっ！火村くんは残ってねえ！こオの素晴らしき天才、鳩中 迅神からありがたあゝいお言葉の特ウ別に差し上げてしんぜようじゃあないかあゝゝゝゝ」

あと、的場くんはあゝ廊下でえゝ待っていゝなさい」

その言葉に従いの場は外に出た。おっさんこと鳩中さんはドアが閉まるのを確認してからいきなり俺にこう告げた。

「いや本当にすまないね。火村くん、君は今どういう状況か分からないでしょ、それをこれから説明するから良く聞いてろ」

「あゝ、つかぬ所お伺いしますが、何故いきなり口調を変えるのでしょうか」

「ん、ああ悪いね、さっきまではフェイク、今のが本当のところさ。で、本題なんだけどね、まず俺こと鳩中 迅神は神の使いなんだよね。で全て話せないけど少し話すよ。でも、その間に口を挟まれるのは嫌だから、悪いけど動きを封じさせてもらうよ」
なんの冗談だと言っておこうとしたら、口が動かない。

「悪いね、話の途中で口出しされるの嫌なんだ。で、神様からの伝言は、“いきなりで悪いが、異世界ってもんに君を突っ込んだ。君にとつての異世界だ。今、悪魔と天使が手を組んで色々な世界を破壊している。ちなみに、世界は全部で不可不説ある。ようは∞の十倍だ。そのうちの3／5が破壊されている。次はこの世界、今君の立っている世界だ。そして次に破壊される予定の世界が君の生まれた世界にあたる。訳あって儂が直々に止められないので、宜しく頼む。他の異世界からも君のようにこの世界に召喚している。ちなみに君がここにくる前に見た火の鳥は儂のペットだ。手違いで……”ここで途切れている伝言だった。……ん！まあゝそおんな訳だからヨォゝロシク。寝泊まりはゝゝギルドの7階の1192室を使っているよォゝはい、こおれヘイユウワァー」
俺に向かって手を差し出してくる。しかし、俺は今動けないのだが

どうしろと言うのだろう。そんな疑問を持っていると。突然、神の使い？こと鳩中さんの手にあるカードキーらしきものを誰かが取った。その手を辿ると驚くべきことに俺が手を伸ばして取っていた。そして、俺の脳は俺の体に指令を出していないのに体が動きだした。丁度、お辞儀の姿勢である。しかし、体が動いているのに俺の言う事は体が受け付けない。そして、遂には口も勝手に動き出す。

「鳩中さん、見ず知らずの俺をここまで親切にして頂いて有難う御座います。本当に頼りがなかったもので………」

「いやあゝそんなあゝ事ないよおゝゝ大した事はしてないよ。お、的葉くんどうしたあゝのかなあゝゝ」

俺の体はまだ言う事をきかないが、体に言いたい事が偶々勝手に動く体と利害一致したかの様に首が後ろを声をするほうを振り向いた。後ろに振り向くとそこに的葉がいた。

ギルドの中（後書き）

この話は途中で途切れてるので午後5..00に後編を予約投稿します。

つまんないと思ってでもぜひ読んでください

ギルドの中<後編>(前書き)

短いとか気にしないでください。

ギルドの中<後編>

「鳩中さん、レベル9の装備の鍵貸してください。あとレベル2と5の鍵も貸してください。徹底に殺りますから」

「ほお、いい鍵」

鳩中さんが投げた鍵をとると的葉は、

「有難う御座います」

と一言その後タカの如く目で追えないぐらいの速さで的葉は部屋を後にした。

「悪かったね火村くん。はい、解除と」

鳩中さんは手をポンっ！と鳴らす。するとどういふことか、今まで言う事を聞かなかった体が言う事を聞くようになった。

「神にも事情があるように神の使いにも事情があるから許せよ火村くん。それと、これギルドの証明の……うむ、どれにしようかな？……これだな」

鳩中さんが自分の机にある引き出しをガサゴソとあさり、小さな指輪を出した。

「これは？」

俺が聞いて見ると鳩中さんは、

「ギルド会員証明の指輪、全ギルド共通で使えるタイプでさらに、この指輪は、“紅魔石”といって魔力を貯めたり、魔力を流すだけで、炎の魔法が使えると言う優れたものを、はめ込んだ高級品で一つ五十万p.mするが神に巻き込まれた君にただであげよう。それと、君にプレゼントだ一銭なしだからな」

そういつて鳩中さんが渡してくれたのは一枚のカード。全体的に黒いが横に赤い線が二本あり、その線の間には良く分からない模様がかかっていた。

「取りあえず的葉くんは天界に恨みがあるからまちきれずにいっちゃたけど、君はさっき言った1192室にいくといいよ」

鳩中さんの言葉に従い俺は1192室に向かった。

「ここが1192室か、自由に使っていいって言っていたけど」

俺は扉のドアノブに手を掛けて開こうとした。が、ガチャ！という音がして鍵が掛かっている事に気付いた。まあギルド会員の借家のようなものだとも聞いているので鍵が掛かっていないとむしろ大変かと思いつながら先程渡されたカードキーを出して扉にかざした。ピーー！という音がしたと思ったらガチャン！と音がした。そして今度こそ、俺は白室になる予定の扉を開けた。

「おおー凄いなあー」

部屋に入ると、一人暮らしには大きめな3Lものリビングがあり1Lの風呂場リビングより何故か大きい9Lのトイレがあった。何故………ギヤグを狙っているのだろうか？

「まあトイレ以外はちゃんとしていて凄過ぎるな。ん、これはなんだ？封筒みたいけど」

リビングに家具がコタツだけ置いてあり、そのコタツの上に封筒が置いてあったのだ。なにやら裏に“神域直行”と書いてある。なんなのだろうか？取り合えず、封筒が膨らんでいるので封筒に手を入れてみた。すると、何かに引っ張られる感覚がしたかと思うと一瞬のうちに俺は意識を失った。

ギルドの中<後編>(後書き)

いやあ

なんと言うか俺ヤツパリダメッすは……だれかあ小説の書き
方教えて

ギルドから“神域”へ（前書き）

戦闘も書けない……………（下手だから）

ギルドから“神域”へ

体中が痛い。けど、俺が寝ている下に芝生が生えている。太陽の光がジリジリと俺を照りつけるがそれはそれでいい。どこからか、暖かい風が吹いているとても心地よい。しかし、そんな夢の世界にいる俺を誰かが呼んでいる。その呼んで声に起こされて、俺は状態を起こした。

「あっ起きた早速だけど自己紹介、黒だ宜しく。そして、神の内の一人さらに、君をここに読んだのも俺、そして……………」

俺は今まで自己紹介をしていた自称神がいきなり気配が変わった事に驚くがなにやら嫌な予感しかなく、殺気をバンバン当ててくる。黒が何か魔法で召喚をしたのが分かった。ん、なんで魔法だと分かるんだ俺は。と思いながら本能のままに今まで倒れていた所から跳ね起きて飛んだ。そこに……シュ！

大きな鎌が俺の寝ていたところに振り下ろされていた。鎌の色はこれこそ漆黒に相応しいと言えるぐらい完璧な黒色であり、刃はとても鋭い。

「おお避けた、こんぐらいはまあ手違いでも必要だよな」

「いきなりなんなんだよ！物騒だろうが！」

「闘え！火村陣生き残るには闘え！」

なんて唐突なのだと思いつつ雷で体を強化しながら黒が振ってくる鎌をギリギリで避ける。紙一重で避けているのは挑発ではなく、強化しても“本当に”ギリギリでしかよけきれないのだ。つまり、黒の振る鎌がとてつもなく速いのだ。振った後に音がついていき、さらに、周辺にカマイタチが起こるほど。

「おいおい、避けるだけじゃ闘いにならないぜ！」

確かによけるだけじゃ闘いにならない。

「だったら、これでどうだ！」

俺は足に強化を集中させこの世の誰もが辿り着けぬ速さで黒からかなり距離を取り、すぐに右腕だけに強化を集中させ地面を殴る。勿論痛いので右腕の周りを雷の膜で覆い尽くした。

「ほおう………」

黒が驚きの声を漏らす。当たり前だ何故なら、その黒が立っているところを中心にごんと大地が一粒一粒が電子顕微鏡で見れないほど小さい砂の粒となっていているからだ。種を明かせば地面を殴った時に、右手から雷を放出し黒の方へと雷を集めた。そして雷のエネルギーに耐えられず石がどんどん粉々に。本物の雷ではあり得ないが、俺の出す雷だと雷に実体を作り出す事もできる。だからこそその技である。

「まあ元々は小さなころイタズラ用の落とし穴作りに考えたものだけだね」

しかし、イタズラ用でも俺の作戦は成功こし、黒はどんどん地面の中へ沈んで行く。普通ならこのままのぬけだせないが、黒のあの鎌を振るうだけでカマイタチがおこる腕力があることから、時間稼ぎにしかない。いまの内に雷を放出するための準備をしようと思いい先程地面に放電した分の雷を急いで取り戻そうとした時。

「こんな物……フンッ！」

地面から砂が大量に噴き出した。黒がどうやら、カマイタチで砂を全て吹き飛ばしたらしい。

「時間稼ぎにもならないなんて………予測していたけど……マズい」
黒がその隙に鎌を振り上げたと思ったら、一瞬で目の前に迫ってきた。比喻でなく本当に一瞬で。そして、黒の鎌が振り下ろされた。

ギルドから“神域”へ（後書き）

多分今日中に又更新します。

いつも短いです。

でもDSIの容量小さいから仕方ないと思う……………

神域の戦い悪魔乱入（前書き）

今まで“俺”と書いていたところを“陣”に変えました。

神域の戦い悪魔乱入

黒の鎌が陣の腹を大きくえぐり漆黒の鎌を赤い血で染める。周りには血が噴水のように勢いよく飛び散る。黒は陣の飛び散った血を浴びていく。そして、陣の意識は陣からドンドンと離れて行く。そして完全に意識を失った。

「ああゝつまない手違いで送られたって聞いたから間違えるほど強いのかと思ったのに……………あっ！ いけね殺っちった！ 白に怒られる……………」

黒はそんな事を言いながら、血を無くした死体に鎌を突き立てた。「どうしよう……………白に怒られる……………そうだ！ 自己防衛にしとくか！」

黒が一人ごとをしていると突然、死体に刺さっていた鎌がまるで塩酸をかけたかのように消えていく。そして、鎌があった所に小ぶりの剣がフワフワと浮いている。黒はそれに気付いた様子もなく、鼻歌を歌っている。さらに小ぶりの剣は黒の気づかぬ内に矛先が全て黒に向いている。そこへ、黒が振り返り、事の異常さを確認した。一瞬の沈黙、そしてすぐに何かが飛ぶ音と、肉に刃物が突き刺さる音がした。

「ウグッ！ なんだと！ 鎌が剣に！」

黒は痛みの余り顔を歪める。そこに誰かを嘲笑う声。黒はその声のもとを辿った。その先にはありえない事に怪我などをしていない陣が居た。但し、発せられる笑い声はこの世のものとは思えない残忍なイメージを持つ“悪魔”の笑い声が。

「お前は“サイト”！ 何故お前が……………何故悪魔であるお前が人間に取り憑いている！ 何故だ！ それに確かに“原世”の頃、封印したはずだ！」

そんな事を聞いていてもまだ笑い続ける陣を乗っ取ったサイト。

「分かんねえゝの神様！ “無”が生まれるから俺の封印が解けたの

さ！この人間は馬が合うから会った時に契約させて貰っただけ、契約の内容は勿論言わない」

「うっ！貴様あゝゝゝ！！！」

黒が物凄い数の魔法陣を造りあげる。更に一つ一つがスカイタワーに匹敵する高さがあるだろう大きさである。

「封印が解かれても滅んでしまえ！！そして、“創”に死んで詫びろ！！！」

「んゝゝマズいって事はないかな？」

「ふざけあがって！！！！死ねええええ！！！」

魔法陣から大量の槍、剣、矢、刀、シュリケン、爆弾などがサイトに向かって解き放たれる。あまりの量にこれを見た物は黒い壁に見えるだろう。

「なんだ、こんなもんか神様あゝゝゝ」

サイトが手を大きく振るとサイトの周りに雷が壁として出来た。そこに黒が放った槍などがぶつかっていく。しかし、壁に触れた瞬間に全てのものが、例外なく何も存在をしていないかのように消えていく。

「ハアハア…………魔力を全部に近く使ったのに……………どういう事だ……………」

「どういう事だろうね、あっ！悪い全部返すぜえゝゝゝ！！！」

サイトが造った雷の壁から今まで消えていった槍など全てがドンドンと生える。その槍が今度は全て黒に矛先を向けいきなり槍が掃射された。まるでマシンガンのように次々と。

神域の戦い悪魔乱入（後書き）

このあらすじ編が終わったらなんとなく、名前を変えて作者が登場しそうです。

雷光への記憶の封印

体の一部大きくがえぐれ、幾つもの風穴があき、この物体は何かすら分らない状態でもその体の持ち主は生きていた。

しかし、呼吸などは存在をしていない。辛うじて生きている所から見てやはり、神と言った所なんだろうか。そんな気配を醸し出しながら、黒にサイトと呼ばれたものは興味が全くないかのように手を握って、閉じて、握って、閉じてと言った作業を繰り返している。

「何故なんだ……… “雷光” としての力が出し切れてない……… 口調も……… “器” のせいかな？ …… 違うな？ 神か………」

黒は最後の力を振り絞っているのだろう。原型を留めてない状態でも一歩一歩踏みしめ、いままでサイトと勘違いをしていた、雷光に最後の言葉になるであろう言葉を述べた。

「……… お……… 前……… の……… 力は……… 少しばかり……… 封印させてもらっ……… た……… 後記憶も……… 少しずつ消えて……… いくように……… もした……… 神を舐めんじゃ……… ねえ……… よ……… サイトではなく……… 雷光か………」

「チッ！」

神による記憶の封印は雷光でも、なかなか破ることは出来ない。それを知ってか、雷光は低く忌まわしいように舌打ちをした。

「まあ……… 一つ言うと“無” は……… “在って” はならないものだ……… “無” が生まれたら収集不可能だ……… その為に……… 神はいるんだから………」

「ウゼエよ神が！」

雷光の指から一筋の光が直線に進む。その延長上には原型すら留めて置けない黒がいた。一瞬の静寂、黒が薪となり燃えていく。燃えていく中で雷光は黒の輪郭が崩れていくのを見た。

「チッ！ 分身かよ！ 分身に記憶の封印をさせられた……… ！ ウゼエ……… ！」

雷光はイライラを抑えることなく全てに発散した。

「ウオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!」

雷光が腕を振るった。山が消し飛んだ。

雷光が大地を踏んだ。大地に谷が出来た。

雷光が吠えた。マントルからマグマが噴き出し地上に這い出て来た。

それを遠く、ずっと遠くで見ている者達がいた。

「荒れてやがるな雷光」

「黒の分身が弱っ！」

「うっせー白！ほんと傍観と伝達用の分身だから仕方ねえだろ！」

「その割りには記憶を封印している力があるなんて……………可笑しっ

！もしかして黒伝達用は嘘なんじゃないのかなっ？」

「……………嘘じゃねえよ……………ホントウニ」

黒と白が見ていた？

「目が泳いでるよ黒っ！」

「やかましいッ！」

どちらも始めの方しか見てはいなかった。

「あ！雷光の封印が終わる見たいだよっ！」

白が雷光の方へ指を差す。その先には頭を抱え苦しんでいる雷光がいた。そしていきなり動きを止め、糸が切れたようにパタリと倒れた。

「今回のイレギュラーは大変だなこりゃ」

黒と白は倒れている人物に接触をする為ゆっくり、ゆっくりと歩き出した。

雷光への記憶の封印（後書き）

今日公開の仮面ライダー000と仮面ライダーwの映画を見てきたぜ
えっと内容がなんとあのスカルがpeerlessで亜
希子がpeerlessだったからpeerlessだった。
た。

※ネタバレはいけません絶対！

※仮面ライダーに興味ない人すいません……………m（――）mペ
コリ

バイクと免許（前書き）

あー！……！！……！！

さぼっていて、スイマセー

これには深く……い訳が………ありません。
すいませんでしたあ………！！……！！

バイクと免許

時が少し進み陣はギルドに戻っていた。部屋には二丁の銃と40と書かれたバターが入っているような大きな箱が8個もあり、その隣には鉄か何かで作られた金属製の防具が置いてあった。

「これは、的葉が置いていったのか……」

取りあえず陣は防具を着て二丁の銃を防具の隙間にあるポケットに入れ、40と書かれた箱をベルトに丁度よく嵌められそうな場所を見つけて装着した。するとズシリと鉄の重みが陣へとかかる。陣は一瞬苦しそうに顔を歪めたが、パチリと陣の体から火花が散ったと思えば陣はすぐにいつもと変わらぬ様子に戻った。

「白と黒が色々いじくったて言うけど特に変わったと思うところは感じないな？ まあいいか、“創”だけか？ それになるのも面白そうだし頑張ってみますか」

そんな意気込みをしながら陣は扉を開けて部屋を後にし、そのままギルドの外へ出た。

「的葉ー！」

陣がギルドを出て的葉へと駆け寄る。的葉はキッ！と陣を睨み。

「遅い！」

と一言いったかと思うと、どこからか二台のバイクを持って来た。

「火村、バイク乗れるよね！ 乗って！ 急いで行くから」

「えっ！ 俺乗れないぞ！」

「はい！？ まあ何でもいいや、物は試し行くよ」

的葉はそう言うのと、バイクに跨りエンジンをふかす。

「ええ！ 事故る前に俺、免許持っていないよ！」

バイクに乗っている的葉に陣言う。

「大丈夫！ ギルドの証明があるでしょう」

「あるけど、それが何か関係あるのか？」

「その証明が免許代わりになるの、だから早く行くよ！」

「マジで！行くの！」

「当たり前！先行くよ！」

的葉はそう告げるとバイクを走らせた。

「待ってくれよ！」

陣も急いでバイクを走らせ、的葉に並走する。

「なあ、的葉ちょっといいか？」

「なに？なんで急いでいるかってそれは天使に両親を殺されたから……」

まだ質問をしていなかったが的葉は答えた。

「それは、お気の毒に。そのこともそうだけど、天界と天使ってなに？」

的葉はハア、とため息をつき。返事を返す。

「火村それも知らないの？天界ってのはつい最近からここに侵略してくる謎の生命体の住んでいるところ。どうやら異次元から空間を超えて来てるみたい。そして、天使はその世界から来る侵略者で特徴が………チッ！」

的葉がいきなりバイクのブレーキを握る。それに合わせて陣もバイクのブレーキを握る。急なブレーキだったのでタイヤが通った道が黒く色が付く。

「的葉どうした！」

「あれが天使の特徴！と言うか天使その物よ！」

的葉が指差す方には人型の羽の生えた緑色の天使がいた。

バイクと免許（後書き）

久々の更新になったぜ！

P S 作者は2週間前に骨折をした………情けねえ（（

桜散る、薔薇咲き誇る（前書き）

戦闘描写、大好きだあゝ！！
か、か、書きやすい！！

桜散る、薔薇咲き誇る

「あれが………天使？」

陣の目に映るのは人型の羽が生えワニのような牙を持ち、腕には鋭い刃を備えた謎の存在。しかも、目で確認が出来ただけで200〜300は居る。

「そう。これが天使、下級の中の下級だけど………油断しないでよね」

的葉が確認をする。しかし、下級の下級と言いつつ的葉の頬に一筋の汗が伝わる。この事から、下級でもかなりの苦戦が強いられる事が分かる。

「ああ、しないさ………素人の俺だからなおさら……ね……」

陣の声は震えていた。恐らく陣も自覚をしているのだろう。陣は天使達の存在感に押されつつあった。

「ぐう……」

不意に来る恐怖感。死への恐怖が陣を少し、また少しと蝕んでいく。それは的葉にもあった。ある程度の場合数を踏んでいるので陣ほどではないがやはり恐怖が蝕んでいく。「おい、天使が囲んで捕食してアレってまさか！」

陣が恐怖と闘いながら天使を観察しているとなにやら天使が"何か"を捕食しているのを見つけた。

「ええ、人よ」

陣は心の底で期待していたのかも知れない。的葉が嘘をついてくれるのを。"人"が食べられている事実を。陣は元々日本人である。人が残酷に死んでいくのを見た事がない。いや、日本人なら殆どの人がめったな事がない限り、残酷な死に方を見る事はない。それを見た陣は吐き気を抑えるのに精一杯だった。

「もう行くわよ、このままジツとしていても被害が増えるだけだし、警備隊は全滅、この状態で動けるのは私と火村だけ。だから行くよ」

的葉はまるで自分に言い聞かせるようにしながら陣へ出撃の意を伝えた。その意を陣は受け取り、陣は力強く頷く。

「……ああ、やるしかないなら、やってやる！」

「有難う、じゃあ行くよ。3……」

的葉は西洋の剣を取り出し、

「2……」

陣は二丁の銃を取り出す、

「1……」

的葉は剣に魔力を流し、陣は銃に弾を入れる。

「0 オオオ！！！！」

的葉は瞬間的に魔力の属性を“炎”にした。

「燃えろ！」炎中？桜（えんちゅう？さくら）”！」

剣から炎が発生する。その炎から散る火花は“桜”が散るようにも見える。その桜が華麗な腕により振るわれる。“桜”は他の花をもさかせた。“緑色の天使の血”。その花をいくつも咲かせる。しかし、咲かせているのは“桜”だけではなかった。

ズトン！ドン！と1丁の銃は派手な音を鳴らしながら天使を貫く。貫いた所から弾丸という“種”を追うように、“緑の薔薇”がいくつも咲き誇る。

「…………ッ！反動がモロ来るな！」

使い手は自分の命という“苗”を守る為にもう1丁の銃も使い、一瞬しか咲かない“緑の薔薇”を育てていく。それでも一向に数を減らさない天使達。的葉はポケットに潜ませておいた手留弾を3個投げ捨てるようになげたのが陣には見えた。陣はその場から離れ、状態をかがめた。そこに、ドカーン！と3発の爆発が起き出した。周辺の天使はミキサーでかき混ぜたかのようになっていた。

「火村！ごめんなさい！手元が狂ったの！」

的葉は謝罪をしながら手を動かす事を止めない。止めたら止めたで自分の命が失われるからである。

「英！大丈夫！」

陣はそんな事を言い方ながら銃を撃っていく。

「くそッ！大すぎる！」

銃を撃ち続けしていると弾切れが起きる。そして、これだけ撃っているところろ弾切れが起きる。

カチリ！

「……ッ！」

そして、運が悪い時に起きる可能性もある。それが今だった。陣の弾切れを狙ったかのように天使が殺到する。牙をギチギチと鳴らし、3体もの天使が陣へ飛びかかる。

桜散る、薔薇咲き誇る（後書き）

誰か～～感想入れて～～～
評価押してくれ～～～

電光石火（前書き）

久しぶりです。

骨折治って書こうと思ったら地震。

此方は地震による被害が少なかったのだが……………

スイマセン（何回目だろう謝るの）

またこんな事もあると思いますがよろしく願います。

最後に東北関東大震災での亡くなられた方々に心よりご冥福を願います。

電光石火

「火村！」

的葉の悲鳴が人が2人しか立っていないなかった戦場にこだまする。陣が抗う様子も見れずに一つ、また一つと天使達の間から赤い何かが出てくる。的葉は頬に一滴の雨を降らせた。雨は頬を一筋の川となつて流れる。しかし、剣を振るう腕は全く止めない。

「また……またなの！なんで天使と接点を持つと人が次々と死んでいくの！一人、また一人と私は一生孤独なの！ギルドのみんなも天使に殺され、今日あった火村までもが………」

的葉が剣を大きく振るう。剣から発生する炎の魔力が“風”に変更された。

“死地の鋭き魔風”

剣から幾つものカマイタチが生み出される。そのカマイタチが次々と天使を切り裂く。天使達は何があったかも知らずに“命の炎”を消していく。その時、陣が居た所から大きな爆発が生まれた。

「えっ！何！魔力による爆発！？」

爆発から発生した風は天使を吹き飛ばす。爆発の中に人の輪郭が見える。

「増援……かしら？」

人の輪郭が次第にはっきりとしてきた。その時、天使の一部が危険を排除しようと人の輪郭に飛びかかった。ギチギチと牙を鳴らし、天使は食いつかんとする。

「危ない！」

咄嗟に叫んだ的葉もここからだと言った攻撃の範囲外だ。しかし、危ないという意思が相手に伝わったらしく。相手は手から炎を生成し、天使との壁とした。そして、天使を焼きはらい、煙から出てきたのは、

「火村！無事だったの！？」

他でもない陣であった。

「爽、大丈夫か？ちょっと離れてて本気をだすから」

陣の言葉には今まで無かった力強さが隠れていた。それを知ってか爽は素直に従う。

「天使に通じるかどうか分かんないけど行きますか……………」

瞬間、陣から火花が散る。まるでこれから何かが始めるかのようにも見える。例えば、有名な物で行くと放電、レールガンなどが挙げられるだろう。そんな予感がすると爽は思う。しかし、それは裏切られた。何故なら、陣が雷の魔力を自分自身に集中させる事により高速移動を実現させたからだ。その速さは完全に目で追えた物ではない。元来放電もレールガンと呼ばれる物も膨大な電力で成り立っている。魔力の属性“雷”は魔力によって成り立つが、常人ではその全ての電力、若しくは魔力を体内に自由に流すことは出来ない。それを陣はやってのけた。その時点で常人ではない事が伺える。特殊体質の人間か魔力飢餓で無ければ通常は有り得ない。何の属性が付加されてない魔力なら常人でも可能だが、魔力に属性が付加されている時点で有り得ない事だろう。

「爽、終わったぞ……………」

「……………ん……………ええ……………!!!!!!」

思考をしていた僅か5秒足らずで、まだ100は残っていたと思われる天使が全滅していた。

「どうやってこんなに早くに天使を全滅させたの？」

的葉は今聞きたい一番の疑問をいち早く知る為に、陣へ聞いた。

「なについて、雷で脳からの電気信号を強くして更に体内の足と手に雷を纏う事で、瞬間的な速さと瞬間的な力で全部の天使を殴って来た」

陣は、わけもない。と思いながら話、的葉は有り得ない！と思いがら聞いていた。

「じゃあ、なんで始めから使わなかったの！？天使に囲まれた時の血は何！？」

的葉が陣にかなりの迫力を持ちつつ迫っていく。陣は少し後退しな

がら口を開く。

「さ、最初からやらなかったのは、あれ人の限界の力を無理やり引き出しているんから、体への反動が大きいから、あまり使いたくなかった」

的葉は、まあ納得と言う顔をし、また陣に疑問を投げかけた。

「じゃあ、さっきも言ったけどあの血は何？」

今度の質問はわざわざ的葉が迫力の有る顔で迫る事はなかった。恐らく一つ目の答えで、とてもリスクが高い事を知ったからだろう。

「あれは、ギルド証明の指輪を使った炎だ」

的葉はうんうんと頷く。

「まああれは威力も低いし、それで、リスクの高いあれをやったと」「そうそう！」

陣は迫力のある顔で迫られる危機が去って行くのを感じて大きく首を縦に振った。その途端に莢がパタリと倒れる。

「ふうー。ちょっと疲れが今頃にさすがに魔力は使わない方が良かったかな……」

陣はパタリと倒れている莢にスッと手を差し伸べた。

「とりあえず帰ろうか」

「うん、そうするか」

莢は陣に差し伸べられた手を元にゆっくり立ち上がる。そして、バイクの方へ行き。ギルドへの道に陣と莢はバイクを走らせて行った。その光景は仲の良い人生のパートナーとも取れる光景だった。

電光石火（後書き）

ちなみにその前の警備隊が戦う前は天使が2000近くはいました。
200〜300は多い方ではありません。

立木井 斤の開始（前書き）

新キャラ登場！

何気疲れる今日この頃。

立木井 斤の開始

斤きんは今現在ギルド9階の武具防具貯蔵庫にいた。窓からは新入りである陣とこのギルド所属でb e t s 3を誇る莢がバイクに跨り、北へと行くのが見えた。

「ん、莢と……誰だありゃ？」

しかし、陣との面識があるのは莢と鳩中のみ。当然斤が知っている訳も無く首を傾げて考えていた。

「ん？本当に誰？……あっ！ヤバい出動準備が……」

慌てて色々な物を一つのカバンに突っ込み、天使に電気をやられているので階段を駆け足で下っていく。そんな斤に声をかける人物が居た。

鳩中だ。

「あ、立木井“ローラーブレード”は……履いてるな。よし、ちょっとじゃ莢と新しい候補者が天使を殲滅しにいったんだけど……」

「ああ、候補者だったんですか。鳩中さん」

「そうだ、だが、この近くにも天使がやって来ているようだな。ちよっと行ってこい」

「へいへい」

そんな会話をしながら斤はギルドを出て行った。

シャア！音を出し、魔力により普通の地面をスケートリンクのように走っていく。その靴はまさにスケートの靴そのものだが、唯一違うと言えば刃の部分がダイヤモンドさえ切り裂く事を科学により可能にしたという事ぐらいだろう。

「お、団体さんではなく、個人の方だべか」

斤が言う通り走る事2分目の前に2人と呼ぶべきか、なんというか。この場合は2頭と呼ぼう。長い鼻を持ち、大きな巨体を有す彼らはさしずめ“象”の天使。と言った所だろうか。

「うーむ、行けるか？格好良さをだしたいな、ヤッパ男だし憧れるからな」

そう言い斤はスーッと天使の方へ滑っていく。天使はそれに気付き2頭で突進というあまりにも原始的でかつ凶悪な攻撃を繰り出して来る。

ドスドスドスドス！！

軽い地響きが起こる。このままだと斤は2頭の天使に潰される。そう思ったのかスーッと滑り出し天使の突進を避ける。しかし、このままでは終わらない。斤はくると振り向きポケットに入っている2丁の銃を取り出し、続けざまに2丁とも3発もの弾を天使へと繰り出した。

パン！パン！

立て続けに軽い銃声が周りに響く。

「グオオオオオオオオ！！」

「ブオオオオオオオオ！！！！」

二頭とも怯む様子も無くまたしても次の突進への動作を起こす。二度目の地響き。そしてまた斤を潰しに掛かっているのに斤は余裕の表情。そして避ける気配もない。

「いいよ、来な」

「グオオオオオオオ！！」

「ブロウオオオオオオ！！」

斤の挑発に乗ってか、さらに勢いを増す天使。

ドスドスドス!!!!!!

誰もが斤を自殺願望者と見て取れるであろう状態で、斤がいきなりニィ!と笑う。

ドスドスドスーーーーッ、ドスン!!

突如として斤の視界から消えた天使。そして天使が消えた当たりところに大量のC4と呼ばれる物を投げる。地面にC4が衝突する瞬間、C4もサッ!と消えていった。

「ヤッター!簡易落とし穴がまさか上手く行くとはなあ!」
そう言い残し落とし穴に背を向け又、スーッと走り出す。

「うーん?もうそろそろいいか?」

斤は又ポケットにしまい込んだ銃を手にし、銃のトリガーを連続で9回押した。

すると、後ろのほうで大きな噴火のようなものが起こった。斤はさして驚かずにフンツと鼻を鳴らしギルドへと帰って行った。

立木井 斤の開始（後書き）

次回斤による講座があります。

ちなみに“立木井 斤”は俺の本名から取ってきた漢字を少し変えた名前だった。

斤による講座

「皆さんご機嫌いかが？ 作者にかわり立木井 斤による講座だあゝ
」！！！」

火村 陣（16）

本作品の主人公

過去にいざござあり、雷光と言う悪魔を陰とする元一般人。只今神クロヒシロに巻き込まれ異世界に留学中（違うよ）。無意識に雷光の力を一部操る。候補者。

的場 莢（女性に年を聞くなと殴られたが、設定16）

ヒロインに位置する。

天使に恨みがあるらしい。

イメージが作者の好きな人（片思い）とか……………

日本刀を扱い敵を切る。付加魔法は得意。

ギルドのベスト3にも位置する腕前。

しかし、ベスト2とはかなりの差がある。

鳩中 迅神（？）

自称神の使者

謎だらけ

作者曰わく考えてない……………だそうだ
勿論一発殴っておいた。

黒、白、ロク、ミー、（∞）

謎、ただし神

立木井 斤（14）

作者の考えをそのまま入れたキャラ。しかし、作者より全てが上なのは、作者の夢だからだろう。創候補者。

炎界、雷光（ $y \parallel x + 2$ ）

悪魔、その他不明。

「じゃあ次は道具講座！ゲストは炎界こと赤フクロウです！」

「君は私を怒らせたいのですか……ふむ、だったらここで殺して差上げましょうか？」

「いえ、ご遠慮願います……ツチ！」

C 4

説明……爆弾

以上

「っておい！なんですかそれは？どうやら殺されたいようだ」

「赤福だまってる！メタギアでそれしか分かんないんだから」

「分かんなくて書くんですか……殺して差し上げましょうか!？」

簡易落とし穴

説明……設置した所の地面を超高圧の水で削り外面だけ残す技術の塊。

「まあ、無難ですね」

斤の持っている銃

説明……一発、一発が遠隔起爆式の爆弾。通常の戦車を跡形も無く吹き飛ばすスペックを持つ。起爆ボタンは銃のトリガーを2秒間に9回押す。

「スペックの高さが自慢の一品だぜ！」

「自慢の……と言う事はあなたが作ったのですか？立木井斤」

「赤福知らなかったの？あれ、俺が前にギルドの一部の武器は作っているって言わなかったけ？」

「知りません」

「…………作者あ!!!!コラア!!!!」

「誰か読んだ？あり、立木井、俺と違って背えー高ッ！さすが俺の夢半分の分身」

「じゃねーよ、どう言う事だよ俺の設定が分かりづらいじゃんか！」

「え！だってまだ一回しか出てないから仕方なくね」

「…………」

「許して…」

（私の出番が消えていきましたねえ。これは抹殺しましょうか……）

ローラーブレード

どこでもスケートリンクのように滑れる。刃の部分はダイヤモンドさえも切り裂けるといふ。靴の後ろにブースターがあり、魔力を流すと人間新幹線になれる。

「赤福、これは移動手段としてあまり使いたくないんだが分かるか？」

「知りもしないし、知りたくもありませんねえ。殺しますよ」

「…………（機嫌悪いな）」

「おおーい、もう時間がないんじゃないかなあー。切り上げないとお。」

「鳩中さん！もうそんな時間ですか！」

「殺し…………」

「じゃあ、皆さんお元気で、バッハハハハ」

「古い挨拶だなあー。久しぶりに聞いたよお。この天才鳩中迅神がねえー」

「神使が殺りあいたいのか？」

「鳩中さんも赤福も落ち着いて。では今度こそ、じゃね〜!!」

斤による講座（後書き）

調子にのった今回許してください。

ちなみに斤の“作者の考えをそのまま書く”ってのは作者がその状態にいてある程度の力を持っていたらこんな反応をするだろうな。と言うのを書いております。

クローバー&1t;スピード>t;(前書き)

いつもの事ながら急展開。

クローバー&It;スピード>

陣と莢はギルドへとバイクを走らせ帰っていた。帰ってきたのだ
が…………

「何…これは！」

ギルドが立っていた場所、いやそれだけではない。ギルドが立っていた広場全体が更地になっていたのだ。まだ更地になって時間が立っていないのか辺りからは煙が出ていたりしている。莢がふらつきペタンと地面に膝を付き脱力した。

「なんで…………なんだって！！ギルドまでも私から奪っていくの！？」
莢の悲しみは人一人が背負うには大きい悲しみなのだろう。莢が倒れる姿を見ていた陣はそう印象付けた。莢の悲しみはついには限界に達し、莢は怒り狂ったかのように地面を殴る。余りの事で感情はコントロールを失い、莢は手から天使とは違う、赤き熱い血が出てきてもそれを止めない。

「畜生！畜生！畜生！！！」

地面を叩く莢の腕から、ゴキッ！と言う音が鳴っても莢は殴るのを止めない。陣にはそれを見ているのがつらく思えた。陣は莢のその行動の原因がギルドの崩壊以外にあると分かったからだ。だから、下手に止めて地雷を踏み、悪化するであろう。と思い、動くに動けなかった。しかし、いまの音が出ても莢は殴るのを止めないので、流石に不味いと思い止めに入った。

「莢！」

陣は莢の腕を掴み止めようとする。しかし、普段明らかに陣の方が強いであろう力関係が逆転した。つまり、莢は陣の腕を払い、またを殴り付けていく。

「莢！止めろよ！そんな事をして何になるんだ！」

「……………」

陣は必死の呼びかけをするが、莢は反応をしない。まるで陣がいな
いかのように振る舞い、殴り続けている。

「止めろ……止めろよ！！！！」

バシン！

更地に大きな音が鳴り響く。その音は陣が莢を叩いた（はたいた）
音だった。かなり強く叩いたせいなのか莢は一度宙を舞い少しした
所に着地した。そう、ピタリと綺麗に着地をしたのだ。

不意に、莢が首をこちらへと向けて来る。その目はトロンとしてお
り、体もダルい時のように脱力したままだ。そして、大きく口を開
いた。

「才前に、ワタシノ心ガワカルカ！！」

莢の姿をしていて莢ではない冷徹な声が更地に轟く。莢をかたどっ
ている、もしくは莢に取り憑いた物が口を開いただけで、まわりの
更地が衝撃波によりえぐり取られた。余りの異常さに陣も少し状況
を察したのか、

「誰だ！お前は俺の知っている莢ではないだろう！！」

陣がそう言うのと、莢、いや莢以外の“何か”がクッククック……と
不気味な笑いを起こし、返答を返した。

「私の名前は、スペードと言う。クロバーの一角でもあり、全て
を斬る物。断つもの。描くもの」

「何を言っている？」

スペードは莢の体を操り陣を指差す。

「貴様の“悪魔”とは対局のものだ。そう、雷光の……な」

「何を言っているのか分からない！悪魔とは何の事だ！！」

「クッククッ……私の……いや、この娘の腹筋を返して欲しいものだ。いや、傑作だ……」

「なにを言いたい！！」

「器の言う事も単純だな。同じ事しか言っていない。クッククッ………本当になにも知らないようだか、問答無用」

「なっ！」

陣の体が宙へ持ち上げられ、遠くへ投げ捨てられる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2454m/>

左手の力と右手の加護

2011年9月2日22時13分発行